

賀茂の競馬には「倭文庄」の乗尻が奉仕するが、「倭文」とは何か調べてみた。結論からいうと、「倭文」は「綾」や「錦」と同じように織物の一種である。正確には「倭文織（しづおり）」で「しづおり」がたまって「しどり」となり、「倭文」だけでも「しどり」と読むようになったと考えられる。倭文庄には倭文織を作っていた「倭文（織）部」が住んでいたと考えられる。始めに、『日本書紀』を見てみる。『日本書紀』には次に示す5例がある。

『日本書紀』にみられる倭文

(その1) 卷2 神代下第九段本文 (文献1、140頁 8-9行目)

一 (ある) に云はく、……故 (かれ)、加 (また) 倭文神建葉槌命を遣 (つかは) せば服 (うべな) ひぬ。……「倭文神、此をば斯図梨俄未 (しとりがみ) と云ふ。」

(その2) 卷6 垂仁天皇39年10月 (文献1、267頁 4-6行目)

一に云はく、……楯部・倭文部……日置部・太刀佩部、併せて十箇の品部 (とものみやつこら) もて、五十瓊敷 (いにしきの) 皇子に賜ふ。

(その3) 卷14 雄略天皇4年8月 (文献1、469頁 原文5行目)

雄略天皇の歌

倭文纏 (しつまき) の 胡床 (あごら) に立たし、……(広辞苑では、あぐら)

原文：施都魔枳 (シツマキ) 能、阿娑羅爾 (にんべん) 陀々伺、……

(その4) 卷16 武烈天皇即位前紀 (文献2、11頁1行目)

大君の御帯 (みおび) の倭文服 (しつ、はた) 結び垂れ 誰やし人も相思はなくに

原文：於婁枳爾 [さんずい] 能、爾 [さんずい] 於寐能之都波陀、夢須寐陀黎、

陀黎耶始比登謀、阿避於謀婆儼俱爾 [にんべん]

(その5) 卷29 天武天皇13年12月 (文献2、466頁11行目)

12月 (しはす) の戊虎 (つちのえとら) の朔 (ついたち)、己卯 (つちのとうのひ=二日) に、……

……新田部連 (にいたべのむらじ) ・倭文連 (しつおりのむらじ) 【倭文、此をば之頭於利

(しつおり) と云ふ。】 氷連 (ひのむらじ) ・凡海連 (おほしあまのむらじ) ……

五十氏に、姓 (かばね) を賜ひて宿禰と曰ふ。

岩波版の『日本書紀』には上記のように仮名がふられているが、

斯図梨俄未は シヅリガミとも読める。

之頭於利は シヅオリとも読める。

以上より、倭文は①しつおり、②シヅオリ、③しとり、④シヅリの四通りに読める。

現在、賀茂の競馬で使っている『しどり(shidori)』は、『しづおり(shiduori)』から u の音が脱落したものと考えられる。後述の淡路の倭文では『しどーり(shidoori)』と長音で発音しているようで、これは『しづおり(shiduori)』と『しどり(shidori)』の中間の発音で、発音の変化を知る上で大変に興味深い。(この発音は 三原郡三原町の地元の人から取材) おそらく

しづ・おり→(しど・おり)→しどーり→しどり

の変化を経たものと推察される。

倭文と書いて『しずり』と発音する場合もあるがこれは『しづおり(shiduori)』からの o 音の脱落で、

しづおり→しづり→しずり

と変化したと考えられる。

「しずり」の用例：倭文神社(しずりじんじゃ)：奈良市西九条町(タケミカツチ神他二神)

『万葉集』には「倭文」を歌った和歌が数首ある。小川安朗氏の『万葉集の服飾文化』(文献4)にはこれらの和歌の一部を引用して解説がなされているが、引用が短いので元の『万葉集』(文献3)をあたり、私見を加えた。

「歌番号 11-2628」は巻 11 にある 2628 番の和歌を示す。『万葉集』は 20 巻から成り、番号は通しの番号であるが、検索の便のため、巻数も示した。はじめに小川安朗氏の解説(文献4)を示す。

倭文(しづ、しつ)

《韃皮繊維の糸を赤青などに染めたものを横糸に用いて斑模様にしたもので、しずり、しずはた、しずおりなどの名称があった。》(文献4 上巻75頁)

この説明からは、倭文が植物繊維の織物で、絹や錦とは異なる材料から出来ていることが分る。

用例1 『倭文機、倭文幡(しつはた)』

11-2628(寄物陳思歌、読人不知)

《いにしへの 倭文機(しつはた) 帯を 結び垂れ 誰(たれ)とう人も 君にはまさじ》
一書の歌に曰く、

《いにしへの 狭織(さおり) の帯を 結び垂れ 誰(たれ)しの人も 君にはまさじ》

この2首を比べると、『倭文機帯』と『狭織の帯』が対応しており、倭文(織)=狭織と考えられるので、倭文(織)は幅の狭い(帯状の)織物と考えられる。束帯の平緒はその名残ではないか。

3-432(勝鹿の真間の娘子の墓を過ぐる時、山辺宿禰赤人の作る歌一首)

《いにしへに ありけむ人の 倭文幡(しつはた) の 帯解きかへて 伏屋立て 妻問ひ
しけむ 葛飾の・・・》

ここでも倭文織が帯に用いられていることが解る。

用例2 『倭文幣 (しつぬさ、3例)』

13-3286 (ある本の歌に曰はく)

《玉だすき 掛けぬ時無く 吾(あ)が思へる 君によりては 倭文幣(しつぬさ)を
手に取り持ちて 竹玉を しじに貫き垂れ 天地の 神をぞ吾が乞ふ いたも術無み》

17-4011 (放逸せる鷹を思いて夢(いめ)に見て感悦びて作る歌一首 大伴宿禰家持)

《大王(おおきみ)の 遠の朝廷(みかど)ぞ み雪降る……(中略)……
ちはやぶる 神の社に 照る鏡 倭文(しつ)に取り添へ 乞い祈(の)みて
吾が待つ時に をとめらが 夢に告ぐらく……》

この『倭文』は『倭文幣』の意(桜井満、文献3)

19-4236 (死にし妻を悲傷する歌一首、作主未詳)

《天地の 神は無かれや 愛(うつく)しき わが妻離(さか)る 光る神鳴り
波多をとめ 携(たづさ)はり 共にあらむと 思いしに……(中略)……
木綿(ゆふ)だすき 肩に取り掛け 倭文幣を 手に取り持ちて な放(さ)けそと
われは折れど……》

以上3例では倭文織が幣に用いられていることが解る。神聖なものに用いられる織物であった。

用例3 『倭文手纏(しつたまき、3例)』

4-672 (安倍朝臣虫麻呂の歌一首)

《倭文手纏 数にもあらぬ命もち なにかここたく わが恋ひ渡る》

倭文布の腕輪は、宝石や金属のものに比べて粗末なものとして、次の句の枕詞

(文献1、桜井満氏の注釈)

5-903 (重き病にありて児等を思ふ歌、山上憶良、神亀二年作)

《倭文手纏 数にもあらぬ身にはあれど 千年(ちとせ)にもがと 思ほゆるかも》

「数にもあらぬ身」は山上憶良が自分のことを(謙遜して)言っている。

9-1809 (菟原処女(うはらをとめ)の墓を見る歌一首、高橋連虫麻呂)

《芦屋の 菟原処女(おとめ)の 八年子(やとせご)の……(中略)……

我妹子(わぎもこ)が 母に語らく 倭文手纏 賤しきわがゆゑ

ますらをの 争ふ見れば 生けりとも 会ふべくあれや……》

ここでは『賤しきわがゆゑ』とは我妹子(=菟原処女)が自分のことを言っている。

(自分は賤しい身分なので、男たちが(自分をめぐって)争うのを見ると……)

折口信夫の『万葉集辞典』(文献5)によると、

しづたまき（倭文手纏）枕詞。しづは古代の文布（あやぬの）で、その緯を青や赤に染めて織った物である。しづたまきとは、即ち、しづを織るのに用いる芋環（おだまき）を言うので、沢山に用いるから、数に言いかけたのだ。また、いやしとつづけたのは、倭文（しづ）と賤（しづ）と同音なところから連想したのである。決して、倭文は下賤な者が着用したからと言うのではない。否、寧ろ、倭文は上代にあっては、上品な物だったのである。

以上の用例 1-3 は帯、幣、手纏といづれも幅の狭いものである。このことから倭文織は幅の狭い特殊な織物であったのではないかと思っている。またそれは神聖なものであり、幣は勿論、帯や手纏もそれを身につけることによりある種の靈力が得られると信じられていたのでは無かろうか。

用例4 『倭文鞍（しづくら）』

5-804（世間（よのなか）の住（とどま）り難きを哀（かな）しぶる歌一首、山上憶良、神亀五年作）

《世間（よのなか）の 術なきものは 年月の 流れるごとし・・・（中略）・・・
ますらをの 男さびすと 劍（つるぎ）太刀 腰に取り佩き 狩弓（さつゆみ）を
手（た）握り持ちて 赤駒に 倭文鞍うち置き はひ乗りて 遊びあるきし
世間（よのなか）や 常にありける をとめらが・・・（中略）・・・
たまきはる 命惜しけど せむすべもなし》

この歌では男が格好良く振舞う様として『倭文鞍』が出ているので、『倭文鞍』は粗末な鞍ではなく、立派な（格好いい）鞍と解釈できる。

関連事項：奈良県天理市に西垂鞍古墳、東垂鞍古墳がある。（石上神宮の南）

以上の用例をまとめると倭文（織）は

- ①高貴な人の帯（垂らし帯）
- ②神に捧げる幣
- ③装身具の手纏
- ④鞍の材料等として使われていた。

久松潜一の『万葉集辞典』（文献6）では

【倭文（しづ）】

《麻、栲（たく、楮（こうぞ）の古名）、芋（からむし、芋麻）などの緯糸を青や赤に染めて織ったもの。絹、錦に対し粗末な織物とされた。》

「粗末な織物」というのは久松潜一氏の私見であろう。私（市）は決して粗末な物とは思わない。

『神社辞典』（文献7）倭文神社（しとりじんじゃ）の項に以下の記述がある。

《日本書紀は『倭文』を『之頭於利（しつおり）』、倭文神を『斯図梨俄未（しとりかみ）』とよみ、延喜式神名帳ではほとんどがシトリとよんでいる。倭文とはシツオリのつまった形で、シツは『日本古来の文様』、オリは『織り』である。》

シツが日本古来の文様なのでシツに「倭文（わもん＝日本の文様）」の文字が当てられているものと考えられる。また、同辞典には

《倭文部の奉斎した、文（しづ）ある布に関する神を祀る神社をいう。祭神は『古語拾遺』石屋戸隠れの段に、「思兼（おもいかね）神、・・・天羽槌雄神（倭文の遠祖なり）をして文布（しづ）を織らしめ、天棚機姫神をして神衣（かむみそ）を織らしむ」とあり、天羽雄神、建葉槌命（日本書紀）、天羽雷命（延喜式）とも称している。・・・（中略）・・・倭文の遠祖天羽槌神は文布（しづ）を織り、供神の料とした。・・・（後略）》

ここで棚機姫はタナバタヒメであり、織り姫である。タナバタは現在七夕と書くが、もとの意味は棚機であろう。機織り機の一種を表していると考えられる。あるいは「手な機＝手織りの機」かも知れない。この後、羽槌（ハツチ）の解説として、《ハツチのハは羽で動物の体を覆うもの、ツは（所有を表す）ノ、チは威力で、ハツチは『着物の神』の意》としている。このあと主な倭文神社として次の5社をあげている。

- (1) 群馬県伊勢崎市東上之町 倭文神社 祭神：天羽槌雄命
- (2) 山梨県韭崎市穂坂町 倭文神社（式内社） 祭神：天羽槌雄命・棚機姫命
- (3) 鳥取県倉吉市志津 倭文神社 祭神：経津主、武葉槌（タケハツチ）、下照姫
- (4) 奈良県北葛城郡當麻町 葛木倭文坐天羽雷（アメノハツチ）神社
（延喜式の名神大社）祭神：天羽雷命
- (5) 鳥取県東伯郡東郷町宮内 倭文神社（式内社）祭神：建葉槌命（主神）、
下照姫命、建御名方命、天稚彦命、事代主命、少彦名命、味耜高彦根命

この他に、京都府与謝郡野田川町に倭文神社がある。ここは丹後縮緬の産地であり、織物の神、天羽槌命を祀っている。（著者の訪問調査）

主題とは少し外れるが、下照姫は葛木の高鴨神社（上鴨社）の主神、味耜高彦根命の妹の高姫であり、葛木の鴨神との関係も示唆される。

(2) と (3) の祭神を比べると、下照姫＝棚機姫の構図もみえ、カモノの神との関係で興味深い。

【静神社（しずじんじゃ）】の項には、

茨城県那珂郡瓜連（うりづら）町静。延喜式名神大社。建葉槌命（主神）、高皇産靈尊、手力男尊、思兼尊の各神を祀る、常陸国二の宮。（水戸市北方、JR水郡線に静駅、うりづら駅の隣）

『常陸国風土記』久慈郡の条に「郡の西十里に静織（しどり）の里あり。上古（いにしへ）の時（よ）、綾（しず）を織る機を知る人のあらざりき。時に、この村に初めて織りき。因りて名づく。」と地名の由来譚を載せ、『和名類聚抄』には、この地を倭文（しどり）と記し、古代当地にシズオリが伝播し、当社の創立となったのであろう。

『常陸国風土記』久慈郡の条（文献22）

《郡西十里 静織里 上古之時 織綾之機 未在知人 于時 此村初織 因名》

まだ綾（しづ）を織る機を知る人がいなかった。この時この村で初めて（しづを）織った。このため、この村を名づけてを静村とした。

この文では「織綾之機」の「綾の意味」が問題である。①綾が「綾織物（綾組織のある織物）」のことか、②単に、綾＝「文様（あや）」のことかが問題である。文脈からは①の可能性が高いように思われるが、いかがであろうか。

平安時代の和歌にみられる【シヅ・シヅハタ】。

(1) 紀貫之集

しづはたに乱れてぞ思ふ 悲しさを 経緯（たてぬき）にして 織れる吾が恋

(2) 伊勢集下

見す聞かす あらましものを 志づ機の 経緯（たてぬき）乱る 思ひせましや

(3) 後撰集巻13

賤機に 思ひ乱れて 秋の夜の 明くるも知らず 歎きつるかな

以上からは「しづはたに（の）」が乱るに掛かる枕詞になっていることから、倭文が乱れ模様の織物だったことが分かる。

また、平安時代の『伊勢物語』（第32段）には次の歌が見られる。

いにしへのしづのをだまき繰りかへし むかしを今になすよしもがな

ここで「をだまき（苧環）」は「しづ布を織るための糸の績麻（うみお）を玉のように巻いた卷子（そえ）」のこと。この苧環の説明は京極流（箏曲）宗家 和田一久氏（文献21）による。

『延喜式』に出てくる倭文（倭布）（神社名以外）

巻1 神祇1 四時祭上 祈年祭

倭文一尺。・・・倭文纏刀形（しつまきたちかた）倭文三寸。

巻21 諸陵寮

其陸別五色帛。庸布。倭文三尺。木綿。麻。

近陵別五色帛。アシギヌ。糸。調布。倭布一丈。木綿。麻。

巻24 主計上

駿河国

調。一 [穴冠に果] 綾六疋。・・・倭文三十端

常陸国

調。緋帛七十疋。・・・倭文三十一端

巻34 木工寮

倭文纏刀形。長二尺三寸 広一寸五分。

(ここで、端は長さの単位で 四丈二尺)

「倭文纏刀形」は「広一寸五分」とあり、倭文がやはり幅の狭い織物であったことを裏付けている。
『延喜式』の書かれた時代には駿河と常陸が倭文の主要産地であったことが分かる。

また『延喜式』には次の倭文神社(静神社)が記載されている。() 括弧内は市の調査による比定地
卷9 神祇9 神名上

大和国葛下郡 葛木倭文坐天羽雷命神社(北葛城郡當麻町加守) 加守神社内

伊勢国鈴鹿郡 倭文神社(鈴鹿市加佐登町) 加佐登神社に合祀

駿河国富士郡 倭文神社(富士宮市星山)

伊豆国田方郡 倭文神社(田方郡伊豆長岡町江間?)

田方郡修善寺町大野の倭文神社(HP)

甲斐国巨麻(コマ)郡 倭文神社(斐崎市穂坂町宮久保)

常陸国久慈郡 静神社(茨城県那珂郡 瓜連(うりづら)町静)

卷10 神祇10 神名下

近江国滋賀郡 倭神社(大津市滋賀里3丁目) 近くに四ツ川がある。

上野国那波郡 倭文神社(伊勢崎市東上之宮町)

丹後国加佐郡 倭文神社(舞鶴市今田)

丹後国与謝郡 倭文神社(与謝郡野田川町三河内)

但馬国朝来郡 倭文神社(朝来郡生野町円山)

因幡国高草郡 倭文神社(鳥取市倭文) 鳥取市南部

伯耆国河村郡 倭文神社(東伯郡東郷町宮内)

伯耆国久米郡 倭文神社(倉吉市志津)

『和名類聚抄考証』(文献8)による倭文の地名(郷名)

美作国久米郡の項 倭文[之止利]

委文郷、天平勝宝九年四月七日、西南角領解。

倭文庄、寿永三年四月二十四日、源頼朝下文案。

淡路国三原郡の項 倭文[之止里]

上野国那波郡の項 委文[之土利]

委文[シトリ]神社、延喜式神名帳(九条本)。

委文明神社、上野国交替実録帳。

倭文神、三代、貞観元年八月十七日、貞観元年八月二十日。

因幡国高草郡の項 倭文(委)[之止利] 倭文神社、延喜式神名帳。

伯耆国河村郡の項 河村 河村東郷、康和五年十月三日、在銘倭文神社経筒。

常陸国久慈郡の項 倭文 静織里、風土記。 静神社、延喜式神名帳。

以上、倭名抄考証による表記は倭文、委文、委の三種類。読みは之止利、之止里、または之土利でシトリ（またはシドリ）と考えられる。

倭文関連の地名（文献12a）

- (1) 岡山県久米郡久米町倭文：倭文川が流れており、賀茂別雷神社領美作国倭文庄の旧地
- (2) 兵庫県三原郡三原町倭文（淡路島）
- (3) 兵庫県三原郡緑町倭文（しとおり、文献12b）
- (4) 鳥取市倭文、倭文神社あり
- (5) 鳥取県倉吉市志津（しつ）、倭文神社あり
- (6) 茨城県那珂郡瓜連町静（常陸国風土記の項参照）静神社あり
- (7) 静岡県静岡市賤機山（駿府城の近く）府中藩から静岡藩へ改名（賤機山にちなむ）
- (8) 大津市穴太に四ツ谷川（下流に志津若宮神社。南方に倭神社、前述の式内社の項参照）
- (9) 滋賀県高島郡安曇川町四津川？（加茂神社あり）

このうち(2)と(3)は隣接地であり、元は一つの『倭文』であったと考えられる。この倭文の地にも倭文川が流れている。緑町の倭文小学校には倭文織の再現したものとあるとの情報もある。

（文献13）

最後に、『広辞苑』（文献14）の【しず】の項を見ますと以下の記述が見られます。

しず（しづ）【静】「静かな」「おちついている」の意をあらわす語。

しず（しづ）【賤】いやしいこと。いやしい者。

しず（しづ）【倭文】（奈良時代には「しつ」と清音） 古代の織物の一。穀（かじ）、麻などの
緯（よこ）糸を青・赤などで染め、乱れ模様に織ったもの。あやぬの。しずはた。しずり。

しずぬの。倭文織。万17「神の社に照る鏡一に取り添へ乞いのみて」

しず（しづ）【鎮子】おもり。おもし。ちんし。

しず（しづ）【垂づ】【夕下二】垂らす。

しずうた（しづうた）【志都歌】上代歌謡で、静かにうたう歌。一説、機織りの歌。

しずおり（しづおり）【倭文織】（奈良時代には「しつおり」）

しずか（しづか）【静・閑】①動かぬさま。②おちついているさま。あわてぬさま。③さわがし
くないさま。④やすらかなさま。

しずがたけ【賤ヶ岳】滋賀県伊香郡伊香具村大字大音にある山。

しずくら【下鞍】「したぐら」に同じ。また、倭文（しず）で作った鞍という。万五「赤駒に
—うち置き」（前出）

しずすげ【静菅】縹のある菅という。

しずたまき【倭文手纏・賤手纏】（「しず」は奈良時代には「しつ」と清音）「数にもあらぬ」

「いやし」にかかる枕詞。

しずぬさ【倭文幣】倭文で作ったぬさ。万十三「——を手に取り持ちて」

しずぬの【倭文布】⇒しず(倭文)

しずのおだまき【倭文の苧環】倭文(しず)の布を織るに用いる苧環。伊勢「いにしへの—
—くりかへし」

しずはた【倭文機・賤機】①倭文を織る機。②倭文(しず)

しずはたおび【倭文機帯・賤機帯】「しずはた」で作った帯。

しずはたごころも【倭文機衣】「しずはた」で仕立てた衣。

しずはたに【倭文機に】(倭文機は綾が乱れて見えるから)「みだる」にかかる枕詞。

しずはたやま【賤機山】駿河国安倍郡(静岡市北部)の山。麓に浅間神社がある。

しずまき【倭文纏】倭文でまとったこと。また、その物。雄略紀「——のあぐらに立たし」

(雄略4年8月、前出)

しずめ(しづめ)【沈】①沈めること。②沈めるためのおもり。

しずめ(しづめ)【鎮】①鎮めること。②おもし。おさえ。鎮護。

【考察】

【志都歌】はその内容が気になりますが、倭文織りを織るときに歌う歌？

“【倭文織】奈良時代には「しつおり」と成っておりますから、清音の「しつおり」の方が濁音の「しづおり」より古いことになり、シトリとシドリも、シトリの方が古いのでしょうか。(この点は疑問点である。)

「しずくら」に「倭文鞍」でなく【下鞍】が当てられています。これは

倭文(しづ)⇒賤(しづ)⇒下(しづ)

と変化したものでしょう。

参考：奈良県天理市に【西垂鞍古墳】、【東垂鞍古墳】(石上神宮の南)がある。

しずすげ【静菅】縞のある菅という。この場合、【静菅】＝【倭文菅】でしょうから、倭文織が縞模様の織物であったことをうかがわせます。

しずはたに【倭文機に】(倭文機は綾が乱れて見えるから)「みだる」にかかる枕詞。

この記述からは、倭文織は乱れ模様の織物であったことが推測されます。

静岡市の【賤機山】はその近くで【倭文機織＝倭文布】が生産されていたことから付いた地名でしょう。「静岡の地名」そのものも、【賤機山】に由来しています(文献19)。

即ち、静岡＝倭文岡(しづおか)

「静岡前」の「静」もひょっとしたら、「倭文(しづ)」ではないでしょうか。

志づや志づ 志づの小手巻(おだまき) くりかへし 昔を今になすよしもかな

女性の名に「倭文子(しづこ)」がある。倭文機のように美しい(上品な)女性になるようにと、名付けられたのであろう。(同音の名前:志津子、静子)

【まとめ】

「しずの項」全体からは、「しづはた」の「しづ」は、【沈】【鎮】【賤】【垂】【静】等と関連のある言葉で、下向きの動作を示すことば」であると思います。

これは、しづ機が倭国に古くからあった原始的な機織りであって、縦糸を水平に張る現在の織り方に対し、縦糸を文字通り縦に(垂直に)張る織り方でないかと考えています。筵(むしろ)を織る縦織りの筵機(むしろばた)の図(文献16)を見たことがあります。この筵機の様な織り方の「はた(機)」だったのでは無いでしょうか。そうしますと、織られた布は下方向に成長して行く(沈む)ことになり、「しづ」の意味合いが出てきます。それと、この機織り方では、縦糸を交互に前と後ろに振り分けますが、このときに振り分けた糸を張るために重り(垂=しづ)を用いたのではないかと推定しています。また、原始的織物であるため、布幅の広いものが織りにくいので、主に帯や幣、手纏のような幅の狭いものに用いられたのではないかと考えています。

古代の機の参考としては

『織機と裂地の歴史』(川島織物、文献9)に弥生機の復元図がある。卑弥呼の倭鏡の想像復元織物のカラー写真もある。(織物文化館館長 森克己氏提供)

『図解技術の考古学』(有斐閣、文献10)にも弥生時代の機織り具の再現想像図がある。

『魏志』倭人伝(文献11)には「紵麻」の名が上げられており、麻系統の繊維を中心としたことが推察される。製品名には「細紵(いちび、ほそあさの布)があげられている。

埴輪の人物像(文献20)

- (1) 手をあげる巫女 群馬県群馬郡箕郷町上芝古墳出土(6世紀):ジグザグ模様の襷のようなものを着けている。
- (2) 腰をかける巫女 群馬県邑楽郡大泉町古梅出土(6世紀):ジグザグ模様の帯を締め、前で結んで、余りを垂らしている。
2例とも、幅の狭い带状のもので、どちらも巫女であるのが気になる。特に後者が倭文の帯の原型に近いのではないかとと思われる。

【参考】倭文機帯をした古代人の図 『古事記・風土記』(福島秋穂著、中道館、1977)14頁
帯を前でくくって、余りを前に垂らしている。タラシヒコやタラシヒメが連想される。

以下は古代の織物の名前についての参考資料です。

前田雨城、『色（染と色彩）』（文献17）による

日本の古代織物の総括的分類による説明

①錦（にしき、きん）

平織、綾織、紋織のすべてを含む。

唐錦

倭錦：両面錦と記される。平織。

裏と表の文様が同一で、色相が反対になっている。

②綾（あや）

錦を除き、また平織以外の織物のすべてを言う。

③絹（きぬ）、帛（きぬ）、衣（きぬ）、平絹（ひらぎぬ）、只衣（ただぎぬ）

これらすべて平絹を示している。

④【糸偏に施のつくり】（あせぎぬ・あしぎぬ・ふときぬ）

国産の絹、中国産より良質のものもある。

⑤布（ふ・ぬの）

麻布をいうのがほとんど。時として葛布、藤布などをいうことがある。

⑥麻（あさ） 本来は大麻の繊維。一般的には亜麻（リネン）・大麻（アサ）・

ラミー・マオ（＝真麻、まを？）などを総称。

「むし」、「お（を）」、「あさ」、「からむし」、「けむし」など。これらを同一視していたともいえる。

別の分類（文献17、一部省略）

（1）錦（にしき）

古代の錦という織物については、美しい織物、高価な織物という以外はほとんど知られていない。

経錦（けいきん） たて糸で文様をだす。

緯錦（いきん） よこ糸で文様を出す。（現在はほとんどこちら）

広東錦・・・幾何文様のもの

蜀江錦・・・動植物を文様に含んでいるもの

（現代の呼称）

(6) 綾 (あや)

飛鳥時代、奈良時代前期では前項の説明 ②)

平織以外のすべての織り紋のある絹布。

糸糸を使用したときは、綾といわず、錦といわれている。

奈良時代の後期(天平時代)では、現在の綾織を示すようになる。

現代式に言えば、綾子(りんず)によく似た織物とみてよい。

(7) 羅 (うすもの) 法隆寺宝物に「羅縹縹円 [衣偏に辰]」

(10) 絹 (きぬ)

①古代において絹といわれていたものを現代の織物としてみると、着物の胴裏に用いる絹布と同じように見えるものである。

②この絹は絹糸で織った織物の総称にも用いられる。

どちらの意味で用いられているかに注意が必要である。

(13) 帛 (はくのきぬ)

帛(はく)は平織の薄い絹。

帛を「きぬ」と読むときは絹織物の総称。

(14) 紗 (しゃ) 現在の紗に同じ。

(15) 布 (ぬの) 麻または紵で織ったもの。

(16) 紵布 (あさぬの)、麻布 (あさぬの)

麻は今の大麻、紵は今の「やぶまお(やぶまを)」のこと。

草の皮(の繊維)より得た糸で作った布。

倭文は(15)や(16)に属することになる。

「倭文布」や単に「文布」と表されることもある。

元は苧麻等の植物繊維で織られたものであるが、後に絹織物が日本に入ってきてから、縦糸に絹糸を使ったり、あるいは縦横とも絹糸の倭文が作られた可能性もあるのではないか。この場合「倭文」は文字通り「倭の文様」の意味となる。角川の地名大辞典(文献19)の各地の倭文(神社)の説明を見ると、「縦糸に絹糸を用いた」とか、「倭文は平絹のことである」との説明まである。日本古来のシヅオリの技術が絹織物にも活かされ、絹糸でシドリが織られた可能性は十分にある。綺(かむはた=神機)は絹織物とされるが、古いものであるらしく、実物が残っていないので、実体が不明であるが、案外これはシドリの絹化製品かもしれない。幣に用いるには麻製品比べて軽く、光沢も良いので、最適であろう。「垂らし帯」の形式化した、「平緒」にも適していると考えられる。

参考文献および補注

- (1) 坂本・家永・井上・大野校注、日本古典文学大系 67 『日本書紀(上)』岩波書店 (S42)
- (2) 坂本・家永・井上・大野校注、日本古典文学大系 68 『日本書紀(下)』岩波書店 (S40)
- (3) 桜井 満訳注『万葉集(上・中・下)』旺文社 (S49)
- (4) 小川安朗著『万葉集の服飾文化(上・下)』六興出版 (S61)
- (5) 折口信夫全集、第六巻『万葉集辞典、新訂版』中央公論社 (S41)
- (6) 久松潜一著『万葉集辞典』弘文堂 (S30)
- (7) 白井永二、土岐昌訓編『神社辞典』東京堂出版 (S54)
- (8) 池邊 彌(わたる)『和名類聚抄郡郷里駅名考証』吉川弘文館 (S56)
- (9) 『織機と裂地の歴史』川島織物文化館(京都、1995)
- (10) 潮見 浩著『図解技術の考古学』改訂版、有斐閣 (2000)
- (11) 石原道博編・訳『新訂魏志倭人伝』岩波書店 (1951)
- (12a) 『県別広域道路地図』大阪人文社
- (12b) ニュータイプ神戸区分地図、昭文社
- (13) 丹羽利和氏私信(兵庫県社町)
- (14) 新村出『広辞苑(第1版)』岩波書店 (1957)
- (15) 森 博達『日本書紀の謎を解く』中公新書 (2000)
 - α郡: 14-21、24-27
 - β郡: 1-13、22-23、28-29
 - その他: 30
- (16) 知里真志保『地名アイヌ語小辞典』(復刻版)北海道出版企画センター (1984)
 - 96ページのpit(ぴっ)“ござ織り機に用いる小石”の説明図
- (17) 前田雨城『色(染と色彩)』(ものと人間の文化史38)法政大学出版局 (1980)
- (18) 福島秋穂著『古事記・風土記』中道館 (1977)
- (19) 『日本地名大辞典』角川書店
- (20) 小林行雄、『埴輪』(陶磁大系3)、平凡社 (1974)
- (21) 和田一久、『京極流箏曲創立百周年記念講演会パンフレット』(2001)
- (22) 秋本吉郎校注、日本古典文学大系2『風土記』岩波書店 (S33)